

香川県教育委員会事務局 義務教育課 尼子智悠指導主事のご指導

【研究テーマについて】

- 1 「学ぶ意味を子供が実感する国語科の授業づくり」のテーマをかかげ、3年間実践を積み重ねている。
 - ・何度も出てくる内容→子供が身に付けたい力を意識する。
(例えば)・その単元で身に付けたい力を意識しながら……。
 - ・子供たちとも付けたい力を共有しておく。
 - ・どのような力を付けるために、学習しているのか。
 - ・どんなことができるようになればいいのか。等 具体的なイメージをもたせる。
- 2 昔出会った算数科の先生から言われた言葉から
「劇等の活動をするとならないうちに国語の力が付く。魔法みたいでええな。」
いつの間にか力が付くのではなく、「力を付けるために、私たちは今から国語の勉強をするんだ。その結果、こういう力が付いたんだ。」ということの子供自身が、自分たちが付けたい力という目的をもって学習に取り組み、付いた力やその過程を自覚できる授業を目指すことで、国語って楽しいな、役に立つな、そんな話す・聞く・書く・読む力を、また別の所で使ってみようという意識になる。国語の力を意識して普段から使うことで、子供たちの力がまた高まっていく。
- 3 メタ認知の研究について
自分自身を客観的に振り返るとは、子供たちにとっては難しいことかもしれないけれど、難しいからしなくてよいでは、力は付かない。自分の活動を振り返る活動を習慣付けることで、メタ認知する力もどんどん深まっていく。
- 4 取り組みの成果に気付かせる
「失敗は成功のもと」できなかったことにも着目して自分を振り返ることも大事である。気を付けることは、メタ認知することで意欲が下がる可能性がある。そうならないために、自分に合った課題を見つける力とセットで育てていく必要がある。振り返らせて終わりではなく、次の課題がつかめているのか、教師が的確に見取り、自分にあった課題を設定することが難しい子供には、課題の選択・協働することで自分にあった課題を見つけさせるという点において、今後の研究において明らかにしていただければと期待している。本当にいい提案だった。

【高松市立多肥小学校の提案について】

1 付けたい力を明確にした単元構成について

単元で中心となる付けたい力を児童が比較した時に書くであろう振り返りを具体的に想像することで、その時間での展開はもちろんのこと、その前後での時間の在り方も見えてきたというふうにおしゃっていたところ。付けたい力に直結する時間は、単元の中のどこなのか。そこをしっかりと教師が見極めて、そこから単元を構成・構想していく。そうすることで、付けたい力と単元の授業がずれない。単元が終わった時に、付けたい力と変わっていく時があるかもしれないが、付けたい力に直結する単元の場所はここと意識することがとても重要である。

2 児童の振り返りの予想から創る単元構成について

児童の振り返りから単元を構成する。『さとうとしお』ではこうだったけれど、『どうやってみをまもるのかな』では、どうなのかな。」と、過去の学びから付いた力を想定して力を発揮する。そのためには、その単元で付いた力を子供たちが自覚していないといけない。身に付いた力がさらにレベルアップしていき、スパイラル的に子供たちの力が付いていく。過去の学びから付いた力を想定して力を発揮する。そのためには、その単元で付いた力を子供たちが自覚していないといけない。そういうサイクルを大切にしていきたい。

【ワークショップについて】

- ・低学年「お手紙」……有効な単元構成やその手立て

子供と一緒に単元計画を作ることや、単元計画を途中で修正することは、低学年では難しいと思われることが多いが、最初はできなくても、やっていくとだんだんできるようになっていくものである。ぜひ、今日考えられた学習活動をもとにチャレンジしてみて、3月には自分たちで「単元計画が立てられるようになったよ。」という子供たちの姿を見ていただきたいと思う。

- ・中学年「モチモチの木」……普段の子供の読書生活に結び付ける実践について考える内容

香川県の子供たちの読書をする時間は年々減っている。読書量の低下のストップをかけられるのは、国語科の学習である。国語の中で深く読んだり、多くの本に出会って本の楽しさを感じたりすることで、本のよさを再認識し、読書活動が活発になる。いかに読書生活に結び付けていくかというところを考えながら単元を作っていくとよいのではないか。「香川の子供たちに贈る 100 冊」の活用も。

- ・高学年「大造じいさんとガン」……付けたい力を明確にした単元作り

付けたい力を付けるには、どのような言語活動がよいのか。その関係性についてワークショップを通して、理解が深められたのではないか。ワークショップをしながら、言語活動の質問もたくさんあげられており、言語活動の大切さを改めて実感できるようなワークショップであった。

どのワークショップでも自分の目の前の子供と向き合いながら、授業の内容を考えられていた先生方が印象的だった。

【本の紹介】（全国の小学生が「一番読みたい本」の1位で新聞に紹介されていた本）

書名「りんごかもしれない」 作者 ヨシタケシンスケ

みなさんの授業はどうだろうか？教科書や指導書にこう書いてあるから、今までこうやってきたから、と教材や子供を決まった見方で見ていないか、と考えてほしい。「単元や導入をこんなふうに変えると、おもしろいかもしれない。」「言語活動をこうしてみると子供たちがもっと食い付くかもしれない。」「教材にこんな本を使うと、もっと子供たちの力が付くかもしれない。」等、教材や子供をいろいろな見方で見ると教材や子供がもっと楽しくなる。そうすると自然と子供たちも国語の授業を楽しいなど思えてくるもの。楽しい国語の授業をどんどん広げていってほしいと願っている。